天狗党の焼き討ち事件

天狗党のことが書かれている碑（太平山の謙信平）

昔、栃木で町中が燃える大きな火事があったそうです。江戸時代も終わりのころで、尊王攘夷運動が高まっていました。この尊王攘夷の考えをもった人々の中に、「水戸天狗党」と呼ばれる集団がいました。

１８６４（元治元）年４月５日、陣羽織を着て馬に乗った武士たちが宇都宮に来て、攘夷を実行するために協力を求めました。しかし、宇都宮藩では協力を断りました。断られた彼らは、さっそく日光に向かいました。彼らこそ藤田小四郎が率いてきた「水戸天狗党」の一行だったのです。

天狗党の約１７０人は、４月８日から１１日までの４日間今市に宿泊し、日光東照宮で祈願し、全国の同じ考えをもつ人々を集めようとしました。その後、武装した彼らは４月１４日、日光方面から例幣使街道を通って栃木町へ入ってきました。天狗党は、太平山に登り４０日ほどとどまり、各地に仲間を送り、攘夷の

協力のための資金と仲間を募集しました。天狗党は、６月１日に太平山を下りて栃木を去っていきましたが、栃木からもたくさんの若い人が天狗党に加わったそうです。天狗党は栃木町を去り、筑波山へ向かいましたが、本隊と別行動をとっていた田中愿蔵の一隊が、栃木町に引き返してきました。彼らは栃木町や付近の村にたくさんの資金を要求したのです。栃木陣屋（足利藩の役所）の役人たちは、このことを足利の本庁に知らせるとともに、吹上藩や壬生藩に助けを求めました。もともと無理な要求に対し、愿蔵と陣屋の役人との話合いもうまくいかず、役人たちは「準備していた鉄砲で討ち取ろう。」としました。しかし、かえって愿蔵を怒らせてしまい愿蔵の一隊は、たいまつを持って栃木の町に火を放ちました。この火事で栃木町は２３７軒も焼かれ、町の人も殺されました。この時の火事を「愿蔵火事」といい、これ以後、栃木町では二度と火事で焼かれないように、家をつくるときは、土蔵づくりにしました。

（「栃木市のあゆみ」栃木市教育委員会から）